

島根県水産技術センター 漁況情報 平成 30 年 7 月 26 日発行

## トビウオ通信 (H30 第 6 号)

(本誌はホームページでもご覧いただけます。ホームページにはバックナンバーもあります。)  
<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

### 《平成 30 年度マアジ新規加入量調査結果速報》

島根県水産技術センターでは、国立研究開発法人 水産研究・教育機構(日本海  
区水産研究所、西海区水産研究所)および鳥取県水産試験場、山口県水産研究セン  
ターと共同でマアジ幼魚の新規加入量調査を実施しましたので、その結果をお知らせ  
します。なお、本調査は、その年に生まれたマアジの加入状況を早期に把握するた  
めに、平成 15 年以降毎年実施しているものです。

#### 結果の概要

- マアジ幼魚は、好適水温帯(16~20℃)が広がる調査海域の沿岸寄りで多く採集されまし  
た。
- 調査結果を基に計算した今年のマアジ幼魚の加入量指数(来遊量の多さ)は、平成  
15 年を 1 とすると 0.69 となり、昨年(2.74)を大きく下回りました。
- 今年のマアジ 0 歳魚の漁獲量は加入量指数の高かった昨年を下回ると見込まれま  
す。

#### マアジ幼魚の採集結果と分布状況

平成 30 年 5 月 15 日から 6 月 21 日にかけて長崎県男女群島周辺から鳥取県西  
部の海域における合計 105 地点において、中層トロール網を用いてマアジ幼魚(平成  
30 年生まれ)を対象とした漁獲調査を実施しました(図 1)。その結果、尾叉長 2~4cm  
サイズを主体に合計 12,622 尾(1 曳網当りの平均採集尾数:120 尾)のマアジ幼魚が  
採集されました。

採集されたマアジ幼魚の分布状況は、マアジ幼魚の適水温と考えられる 16～20℃ (水深 50m) の水温帯に多くが分布していました。分布範囲は例年同様、五島列島から隠岐諸島の広範囲に及んでいましたが、1 曳網当たりの採集尾数が多かった調査地点は鳥取県から山口県の沿岸寄りに多く、分布密度は全体的に低くなりました。

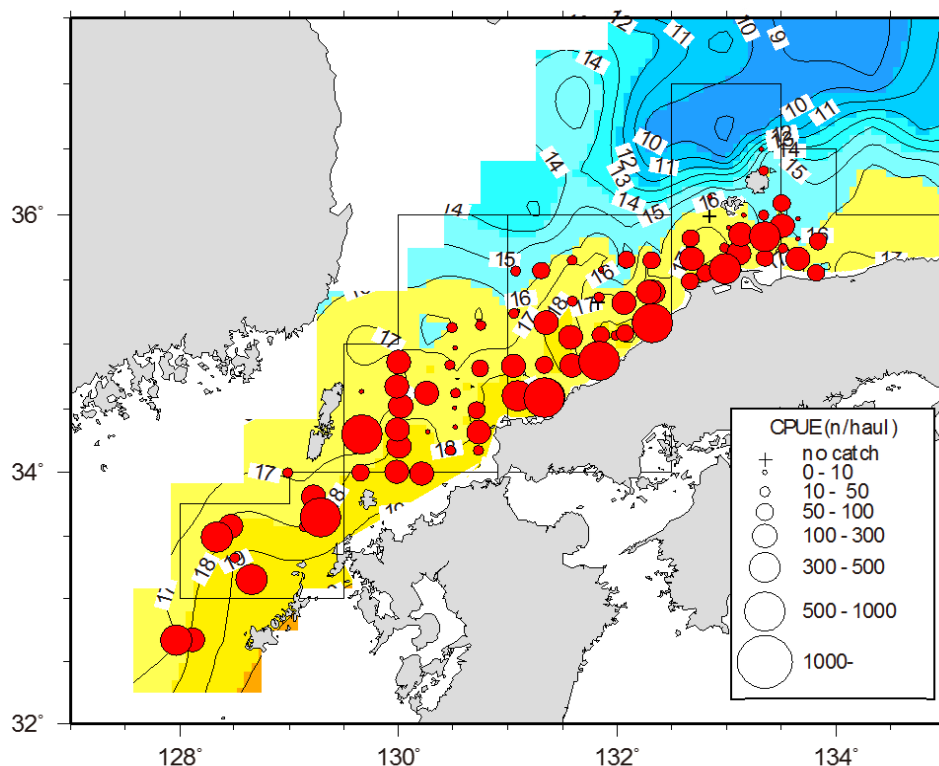


図1 マアジ新規加入量調査における平成30年のマアジ幼魚の採集結果  
 円の大きさはマアジの採集量の多さを表し、+は採集されなかった点を表す。  
 コンター図は水深50mの水温分布(16℃以下が青色、16～18℃が黄色、18℃以上がオレンジ色)を表し、図中の数字は水温を示す。

(資料：国立研究開発法人 水産研究・教育機構 西海区水産研究所作成)

### マアジ幼魚の加入量と今後の漁況

マアジ幼魚の分布量と調査海域の水深50mの水温分布を基にして求めたマアジの加入量指数(来遊量の多さを表します)は、平成15年を1とすると、今年は0.69となり、昨年(2.74)を大きく下回りました(図2)。今年の加入量指数は調査を開始した平成15年以降で見れば、調査を実施している15年間の平均値よりもやや低い値となりました。この加入量指数は、その年の6月から12月の間に境港でまき網によって水揚げされ

るマアジ 0 歳魚の漁獲尾数とある程度の相関がみられることから、今後の山陰沖におけるマアジ 0 歳魚の漁獲量は加入量指数が高かった昨年を下回ると見込まれます。

マアジは小型魚のうちに獲るよりも、1年後に成長したものを獲るほうが単価が高く経済的に有利です。しかし、夏季には他の浮魚類(イワシ類やサバ類)の漁獲が減少するため、マアジ 0 歳魚が集中的に漁獲されることが多くなります。単価の低い小型魚を獲りすぎてしまうと、単価の高い大型魚の漁獲量が減るだけでなく、将来の産卵親魚の減少につながるため、過度な漁獲圧力がかからないよう適切な管理を行っていくことが大切です。

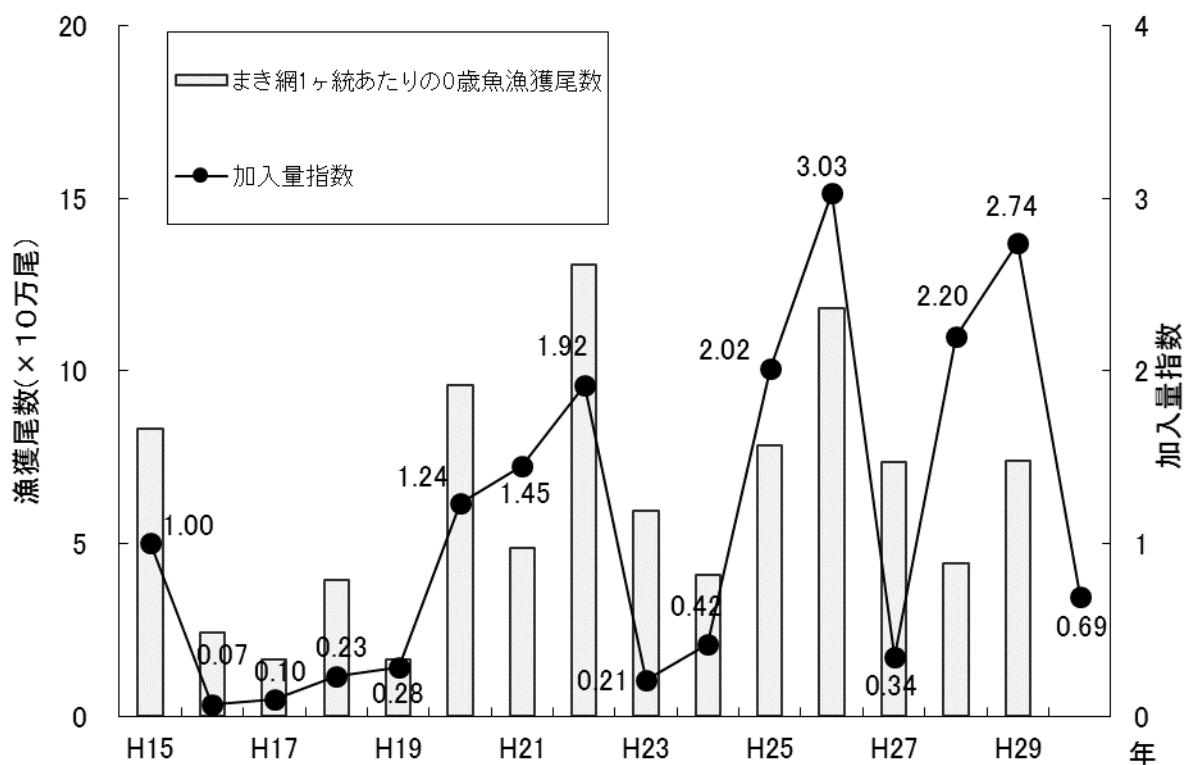


図2 マアジ幼魚の加入量指数と境港におけるまき網1ヶ統あたりのマアジ0歳魚の漁獲尾数\*の年動向

\*6~12月に境港に水揚げされたマアジ0歳魚の尾数を水揚げしたまき網漁船の数で割ったもの(鳥取県水産試験場集計)